

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

ブラフマニズムとヒンドウイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性

Brahmanism and Hinduism: Change and Continuity in South Asian Society and Religion

2. 研究代表者氏名

藤井 正人

Fujii, Masato

3. 研究期間

2019年04月 - 2020年03月 (1年度目)

4. 研究目的

ブラフマニズム(バラモン教)は、ヴェーダ文献に基づく宗教儀礼と生活・社会規範を含む古代インドの支配的宗教体系である。その後の仏教やジャイナ教など、ヴェーダに基づかない非正統派の宗教の成立と前後して、ブラフマニズムの内部および周辺から、新しいタイプの信仰形態、宗教思想、宗教儀礼をもつヒンドウイズム(ヒンドゥー教)が形成されていった。しかし、ブラフマニズムはヒンドウイズムへと移行・解消したのではなく、両者はインドの社会と宗教の二つの基軸として、現代に至るまで並存し、混淆し、互いに影響を与え合ってきている。本研究は、ブラフマニズムとヒンドウイズム、およびそれらと距離をおきながらも共存してきたその他の宗教との通時のおよび共時的関係に関する研究を通して、南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性を解明することを目的としている。

Brahmanism and Hinduism, although the latter succeeded the former historically, have coexisted, mingled with, and influenced each other as two fundamental religious and social systems in India. The present three-year research project intends to shed fresh light on change and continuity in South Asian society and religion by studying diachronic and synchronic relationships between Brahmanism, Hinduism, and other religions such as Buddhism and Jainism which keep a certain distance from these two mainstreams.

5 研究成果の概要

本共同研究は、昨年度(2018年度)で終了した同じ研究課題の共同研究の成果のとりまと

めのために、1年間、延長して行ったものである。昨年度まで、半年ごとに特定のテーマを設定して定例研究会を重ねるとともに、半年の終わりにそのテーマによるシンポジウムを、3年間で計6回開催した。今年度は、これまでの研究を補完するとともに、十分に扱ってこなかった諸点(信仰、教理、聖典など)について研究をおこなうために、半年に分けずに一年間を通じて研究会を開き、研究期間の終わりに、以下のような本共同研究の最終シンポジウムを開催した。

6 共同研究に関連した公表実績

京都大学人文科学研究所共同研究

「ブラフマニズムとヒンドゥイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」

第7回 シンポジウム「古代・中世インドの社会と宗教 —「聖典」の諸相」

2020年2月23日(日) 京都大学 芝蘭会館 別館

7 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果として論文集『ブラフマニズムとヒンドゥイズム』(2巻)の出版を予定している。第1巻は「古代・中世インドの社会と思想」という副題のもと、「社会と文化」「王権と宗教」「知識と学問」をテーマとした16の論考からなる。第2巻は「古代・中世インドの宗教と実践」という副題のもと、「神話と表象」「信仰と儀礼」「出家と修行」をテーマとした17の論考からなる。2021年2月の刊行予定である。